

2.7 自分の希望を叶えるエケコ人形

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 慶太, 山田, 幸生, 中牧, 弘允 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008313

2.7 自分の希望を叶えるエケコ人形

木村 慶太・山田 幸生・中牧 弘允

(立命館宇治高等学校, 関西大学初等部, 国立民族学博物館名誉教授・吹田市立博物館)

要旨：南米発祥のエケコ人形について文化人類学的な視点を提示し、それにもとづき製作を行った。
まず、国立民族学博物館（以下 みんぱくと記す）の中牧弘允が、エケコ人形の由来及び日本文化との共通点等に関する解説を行った。続いて、小学校図画工作科における実践事例を報告した後、参加者が各自のエケコ人形の製作を行い、感想を出し合うことで、学びのまとめとした。

キーワード：エケコ人形, 縁起物, 招福, 祈願, ものづくり

1 はじめに

国際理解教育の大きな目的の一つは「自文化と異文化の共通性と差異性を知り、理解することにより他の人種・民族に対する寛容な心を育てる」ことである。

「理想とする自分の姿に近づきたい」「欲しい物を手に入れたい」と、昔からどの国の人々も願ってきた。人々は、その願望を叶える力を持つと考えられてきた神や天に、様々な手法や道具を用いて思いが届くように工夫してきた。いわゆる「願掛け」「縁起物」と呼ばれるものは、それらの歴史を背景としている。

本ワークショップで題材として取り上げたエケコ人形も、南米ボリビアのアラシタの祭りで売られる願掛け人形である。日本でも最近メディアに取り上げられ、ずいぶん知られるようになった。また合わせて、海外の雑貨を扱う店舗などでも販売されるようになってきた。本ワークショップにて参加者は、エケコ人形について専門家による講演を聞き、小学校での実践報告に触れ、自分の「オリジナルエケコ人形」を製作する。その過程の中で、「小学校図画・工作科からの国際理解教育」「ものづくりから思いが広がる国際理解教育」の手法と可能性について考え、意見を交流するとともに共有することを目的とした。

2 エケコ人形とは

南米ボリビア・ペルー・チリのアンデス地域に住む先住民族であるアイマラ族は「エケコ人形」と呼ばれる「願掛け人形」を製作する。

「エケコ人形」は、ボリビアで毎年1月24日に行われるアラシタの祝祭で売られている陶器製の人形である。ほとんどが両手を広げた口ひげをつけた年配男性で、口を開けて笑っている。その人形に、自分が手に入れたいもののミニチュア品を持たせ、口にく

願うものは何品あってもよいので、体じゅうに様々なミニチュア品がくくりつけられて胴体が見えなくなっているのが普通である。表1に実際に飾られているものの一例を次に示す。

袋に入った穀類（米、麦など）	缶詰めの食料品
洗たく用の粉石けんや固形石けん	鍋、フライパンなどの調理器具
お札（ポリビアーノ、ドルなど）	クレジットカード
大学の卒業証書	家（庭付き豪邸のミニチュア）
各種資格証（介護士資格、医師免許、教員免許、運転免許など）	パソコン、冷蔵庫、洗濯機、ステレオなどの家電製品
レンガや鉄骨などの建物の材料	オートバイ、乗用車、トラック
ドレスなどの服飾品	パスポート
航空券や鉄道、バスなどの切符	宝飾品

事前の準備として、参加者が直接触れることのできる「エケコ人形」その附属物、及び酉の市で販売されている「熊手」を用意した。

A black and white photograph of a table covered with various items, including a large stuffed animal, a small car, a box, and several bags, suggesting a collection or display.

本ワークショップでは、「エケコ人形」「熊手」ともに参加者に自由に触れてもらえるようにした。

126

手」は、渋谷敬三のアチック・ミュージアムから1975年みんなくに移管された貴重なものである。

ものづくり教育において、本物を直接見たり手に触れたりすることは、「本物のもつ力」に触れることであり、創作意欲を大いにかき立てる効果が期待できる。

今回もハンズ・オンによる実物展示により、参加者はじっくり手に触れ観察することで、その後の製作へのヒントをつかむことができた。

また、参加者が製作するエケコ人形の素材として、紙粘土で人間を形どり乾燥させたもの（約15cm 肌色に着色後ニス塗装仕上げ済）および油性サインペン（8色）、エケコ人形に身につけさせるミニチュア品（紙幣・自動車・スポーツ用品などの玩具）を用意した。合わせて参加者が独自のミニチュア品を製作できるように、紙粘土やダンボールも用意した。

その他、ミニチュア品をエケコ人形の身につけさせるための針金や願いを書き込むための用紙などを用意した。



写真3 準備したハンズ・オン展示2 酉の市の熊手

4 ワークショップの実際

(1) 解説

はじめに中牧弘允がエケコ人形に関する専門的な内容および背景について文化人類学的な視点から解説をおこなった。

エケコ人形は近年、日本でもときどき見かけるようになった。もともとはボリビアの首都ラパスでおこなわれる1月24日の祝祭アラシタの門前市で売られる人形である。参詣者は好みのエケコ人形を

もって大聖堂に行き、神父（神）の祝福を受ける。アラシタとはアイマラ語で「わたしから買って」という意味であり、それを拒むとエケコのたたりがあると信じられている。エケコは毛糸のとんがり帽子をかぶり、口ひげをたくわえ、タバコをふかし、ボンチョを身にまとっている。女性が身に着けていた多産のお守りやミニチュアの品々をたくさん持っている。縁起物の選択は購入者に任せられる。つまり、裸の人形を買って、ほしい物をつけるのである。露天商が売っているミニチュア製品は豆、パスタ、食用油、コー



写真4 中牧による解説

ラなどの食料品、石鹼、洗剤、つば、かご、サンダル、簪などの生活用品からサンポーニャのような民族楽器まで、あるいは自家用車から二階建ての住宅、そして特徴的ながドルやペソの紙幣である。最近ではできあいの人形もお土産品として売られている。まさに欲望の権化のような格好をしている人形である。

日本ではこの種の縁起物となると、西宮や大阪今宮の十日戎の笹を想起する。関西の十日戎の笹に対し、東京では西の市の熊手が有名である。民博にはアチック・ミュージアム収集の古い熊手が収蔵されている。アチック・ミュージアムは渋谷敬三（1896-1963）が旧制中学や高校のときの同級生とつくった屋根裏の博物館であり、1921年に正式にスタートした。渋谷敬三は渋谷栄一の孫にあたり、日銀総裁、大蔵大臣をつとめた実業家であるが、民俗資料、民族資料の収集につとめ、映像記録を残すなど、民具学の発展に貢献し、同学・後進にたいし支援を惜しまなかった。さまざまな経緯を経て、1975年、約20,000点の資料が民博に移管され、2001年には企画展「大正昭和くらしの博物誌―民族学の父・渋谷敬三とアチック・ミュージアム」が開催された。

エケコ人形は個人の願望を集約したものだが、熊手や笹の縁起物は商売繁盛、家内安全など家の願いを託している。いずれにしろ、縁起物や福神をもとめる心意は「よりよい暮らし」に直結し、さまざまな文明が多様な形象を産んできた。エケコ人形はかなりストレートな形でそうした願望を表現していて、世界的に人気をあつめはじめている。

これらの思いを単に欲望の権化ととらえるのではなく各国・諸民族の生活からにじみ出るものとして考察することの重要性についても言及した。

参加者は、学校教育においては扱いづらい、そうした願望を「国際理解教育」の題材のひとつになりうる可能性について考えを深めることができた。

（2）小学校6年生での実践事例の報告

参加者が製作を開始する前に、本ワークショップと同様の教材を扱った小学校6年生の図画工作科における授業例を主催者側の山田幸生が報告した。卒業を前に将来の夢を考えるカリキュラムの一環としてエケコ人形の模倣・創作を行った実践である。

〈報告の主な内容〉

小学校における報告例では、製作実習の前にアンデス地域の地理や「エケコ人形」とはどんなものなのかを知る事前学習が道徳の時間（4-（8）国際理解）に行われた。児童たちは、南米の地理や文化を地図や画像を確認しながら知識を深めた。



写真5 エケコ人形を鑑賞する児童

その後、エケコ人形の解説に進み、願掛け人形であることを理解させた。

そこで、日本との共通性を探る話し合い活動の時間を取り、異文化理解の視点からエケコ人形を捉えるようにした。

その際、実物を手にすること（ハンズ・オン）で、より理解が深まるようにした。

話し合いの後、児童からは、姿や形が似ている人形はないが、モノに願いを込めることは、日本でも行われているという意見が出された。児童が挙げられたモノは「だるま」「信楽焼の狸」「鯢鉾」「鬼瓦」「招き猫」「熊手」などである。

さらに、指導者側から、七福神の恵比寿や熊手を提示した。とくに熊手は幸運や金運をかき集めるという願いを込めて鯛や松竹梅などの縁起物をたくさん飾るもので、商売繁盛を願うものであり、エケコ人形との共通性を確認することができた。続いて、みんなのアウトリーチ教材「みんなのアンデスの玉手箱」を活用し、生活文化にふれる学習もあわせて行った。

その後、図画工作科での制作に進んだが、卒業を前にした6年生での実践であったこともあり、将来の夢を込めた人形づくりをテーマとした。児童は、それぞれに自分の将来の姿を人形にし、そこに様々な願いごとをミニチュアに託し、自作のエケコ人形に括り付けた。なお、タバコは扱わないこととし、イメージができた児童から製作に取り掛かった。



写真6 ミニチュアの製作

現地の人々はたくさんの願いを「エケコ人形」の体に括り付ける。

これを参考に、児童は自分の願いを考えながらミニチュアを製作した。はじめは夢や希望が浮かびにくい児童が多く、製作途中で徐々に思い付いてきたという児童が多かったが、国際理解の視点だけでなく、卒業を前に自分の将来について考える教材としての有効性を感じることができた。児童が人形にくくりつけた願いの主なものを以下に示す。

表2 児童がエケコ人形に込めた主な願い

・お金持ちになりたい	・プロ野球選手になりたい	・大きな家がほしい
・服がほしい	・たくさんの友だちがほしい	・ケーキ屋さんになりたい
・大学を卒業したい	・空をとびたい	・世界に行きたい
・絵がうまくなりたい	・目がよくなってほしい	・流れ星を見たい
・芸能人に会いたい	・英検に合格したい	・店を継ぎたい など

大工になりたい児童は、大工の人形を作り、大工道具のミニチュアを飾る。そして、

パティシエになりたい子は、ケーキを飾ったが、ゲームやお菓子などの欲しいものもたくさん盛り付けていた。

そのなかで、ある児童が「ボリビアのエケコ人形に飾られている物は、生きていくために必要なものばかりだけど、自分たちの飾る物はゲームなどもあり贅沢なものばかりで僕たちは恵まれている。世界には、生活するだけでも大変な人たちがいるんだなあと思った」という気付きに至った。このように、将来の夢を考えるだけでなく、世界の人々の生活感にふれ、自分たちとの差異性にせまることができる教材としての可能性も伺えた。製作を終えた児童の感想を以下に記す。



写真7 児童の作品

○文化の違いを感じた

- ・ボリビアの人々が願っていることは、食べ物为中心で、生活に苦勞しているのかもしれないと思った。僕たちは、おしゃれ・ゲームなど贅沢なものが多かった。

○共通性を感じた

- ・日本にも同じように願いを込めるものがあるから、幸せを願う気持ちは同じだと思った。

○学習の広がり

- ・他の国でも同じようなものがあるのか調べてみたい。
- ・世界のみんなでこんな人形を作ったらおもしろそう。

○関心・気付き

- ・ボリビアの人々と同じようなものを作ると距離が近く感じられて、本当に会っているような気がした。
- ・あまりないと思っていた自分の願い事がたくさんみつかった。
- ・自分たちは、ほしいものが少なく、願いをあまり込められなかったということは、僕たちは幸せなんだと感じた。

(3) 参加者による製作

上記の講演・展示物の鑑賞・報告を踏まえて、参加者が製作を行った。

製作時間短縮のため、参加者には前述の通り、肌色塗装ニス仕上げ済の人形素材を配布した。実際のエケコ人形は陶器であるが、学校現場でより手軽で簡単に扱えるよう紙粘土を材料とした。また、あらかじめ単色で服の色も塗っておいた。参加者は、サインペンを使用し、顔と髪の毛を自由に描き入れ、エケコ人形の本体を仕上げた。

その後、人形の体に貼り付けるための願い事を象徴するミニチュア製作を行った。事前に準備しておいたものを使用するほか、参加者自身で製作する場面も見られた。

参加者が製作を行っている間、主催者側は学校での実習授業同様、机間巡視をし、アドバイス等を製作上の行おうとしたが、あまりその必要はなかった。

学校現場でのものづくり実習においても、手順がはっきりとわかっている場合、児童・生徒は淡々と集中して作業を行う。

本ワークショップにおいても参加者にそのような姿が見られた。しかし、作業は単に沈黙の中で行われていた訳ではなく、机を向き合う形にして製作を進めたこともあり、参加者同士の会話はなされていた。

すべての参加者がそれぞれの願いを込めたエケコ人形を時間内に完成させた後、意見交流の場で、その会話の内容も報告された。



写真8 顔を描く参加者



写真9 ミニチュアを飾る参加者

(4) 意見交流 ― 参加者の感想

再記となるが、本ワークショップは図画工作科における国際理解教育の一つの提案である。

それを受け、まず参加者からは全ての教科において国際理解教育が可能であることを



写真10 参加者作品①



写真11 参加者作品②

実感したとの感想が述べられた。

続いて、この授業実践を単に自分の欲しいものを表現するだけに終わらせないためにも、教師側にも、国際理解や自文化理解教育に関する一定の知識と力量が必要であるとの意見も出された。

また、エケコ人形から学びを広げることにより、国際理解の視点以外にも、自分の希望だけではなく、級友や他人の希望や気持ちを大切にする学習に結びつけることができるのではないかと意見も出された。

5 まとめ

「エケコ人形ほど楽しい人形は世界中にもちょっとない。」

これは本ワークショップにおいて、様々なご助言ご指導をいただいた中牧弘允の言葉である。体中に札束や穀物などを括り付けたエケコ人形のいでたちは何となく不思議な感があり、ラテン系の笑顔はエキゾチックでさえある。南米の人々が、願いを叶えるために曜日を決めてタバコを吸わせたり、設置する方角を決めたりする姿には、明るくユーモラスなものも感じる。陽気なものには、やはり楽しさがある。

しかし、エケコ人形の背景には南米の人々の暮らしや宗教観がしっかりと存在しており、さらにそこには、日本文化との共通項がある。

本ワークショップ及び小学校における実践は、それらのことに注目し実施した。参加者は、まずエケコ人形の外観に興味を持つ。その後、幾許かの専門的な知識を得、製作を行う。製作を通して、異文化に触れ、そのモノの背景に思いを馳せる。そのとき初めて気づきがある。参加者からは、モノから広がる国際理解の一端を垣間みることができたとの評価をいただいた。

世界中には、人々の暮らしや文化に根づいたモノが無数にある。そして、その中には教師のわずかな工夫により、児童生徒の製作教材となるモノも無数にある。今後も、そのような教材を開発し続けたいと考えている。

モノに触れる、モノをつくるというのは、非常に有効な教育の手法である。

参加者が、本ワークショップにより、「国際理解につながるものづくり」について何らかのヒントを得ていただければ幸いである。